

巨匠の素顔

今月は読響特別客演指揮者の小林研一郎、ドイツの重鎮ツァグロゼクと、二人の巨匠が登場する。その素顔に迫りたく、小林研一郎にインタビューを行った。また、ツァグロゼクについてよく知る音楽ジャーナリスト・来住千保美にその人柄について寄稿いただいた。(編集部)

小林研一郎インタビュー

作曲家が降りてくる境地に

—読響の特別客演指揮者に就任した2011年8月からの、読響との7年半を振り返っていただけますか？

もう7年も過ぎましたか。時間が経つのは早いですね(笑)。読響の皆さまからは、たくさんのことを教えていただきました。個々の演奏能力が高く、一人一人が音楽に意欲的に取り組んでくださる。音楽で主張をすることも恐れませんが、時に、協奏曲などでバランスを整えるのが難しく感じることもあります。時に、協奏曲などでバランスを整えるのが難しく感じることもあります。オーケストラでの音楽作りの原点だと思っています。7年半の間、燃焼し尽くした思い出深い演奏ばかり。もちろん、自分の中では反省点も多く、ざんき慙愧の念に堪えないところもたくさん

あります。

—マエストロは、常に音楽に熱い魂を込めて指揮されています。

私一人で魂を込めているのではなく、読響の皆さまから魂を込めさせられていると感じています。皆さまが私のもう一つの心となって、熱く語りかけてくれる時、とてつもない演奏になるんです。演奏中、きらめ楽員の皆さまの感性が、奥底で煌き、私を包んでくれます。私にはそれに応える義務があります。感性を持続させ、もっとまばゆく煌くようにと思いながら指揮しています。

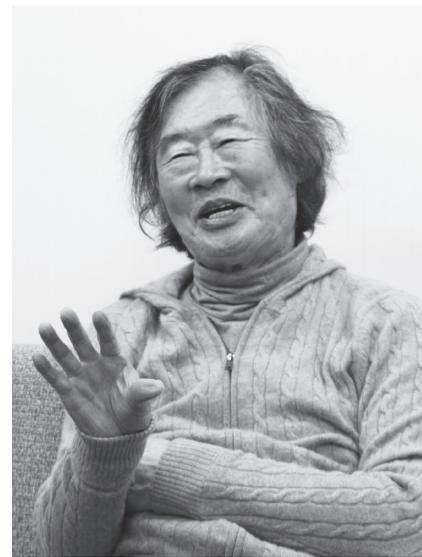
—まもなく79歳。指揮生活もまさに円熟期に入っています。

当然のことながら、国際コンクール

に優勝した若い頃の活力に満ちた自分は、だんだん影を潜めるのです。でも、どこかで爆発したいという特異な思い。どうやって自分の中の音楽を変えられるかと、もがいています。75歳を過ぎて、一種の老境というか、ベートーヴェンやブラームスら作曲家が降りてきて、自分の心の中で何か咬いてくれるような。何度も振っているベートーヴェン〈第九〉でも、行間に新たな宇宙を発見することがあります。指揮者はスポーツ選手と同じく体力の維持が大事なので、健康には気を使っています。日頃から歩くように心がけていて、ジムにもできるだけ通いたいと思っています。ゴルフも好きなのですが、スコアが落ちて衰えを感じてしまうので、最近あまりやらなくなってしまいました。

—2019年度は、ドヴォルザークの第8番と第9番を指揮します。第8番は、読響とは2002年以来、17年ぶりになります。

第8番も第9番も、作曲家が失恋や結婚など様々な人生経験を経て、大人になった音楽のような気がします。作曲家の人間の神髄が聴けます。人間臭さや心のひだを感じ取って頂けたらと思います。第8番は、どこを取り出しても魅力的な歌に溢れています。また、行進曲調のところにも郷愁があり、大らかなチェロの旋律や管楽器の



ヴィルトゥオーソ的な部分も聴きどころです。第9番は、ドヴォルザーク・ホールでチェコ・フィルと録音した思い出深い曲。作曲家が音に込めたと思われる木々のそよぎや、風のたおやかさなどを表現できれば、と思っています。

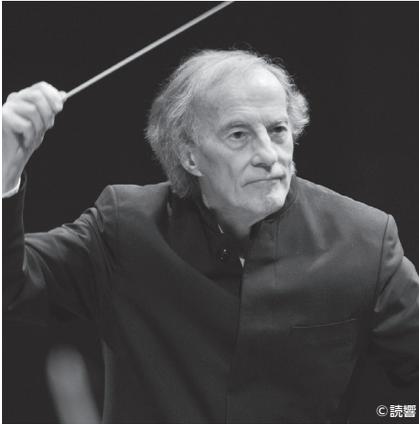
—6月には、読響では初めてとなるフランクの交響曲を指揮します。

大変な名曲なのに演奏機会が少ない。読響とぜひ演奏したいと思っていた曲です。チェコ・フィルとの2008年の録音以来、久々です。深い信仰心に溢れている作品。祈りの中の祈り。冒頭から棺を背負って歩くような重々しいイメージです。自分の歩んで来た人生を振り返りながら進み、ゆっくりと音を慈しむように演奏できればうれしいです。(聞き手・事務局)

ツァグロゼクの素顔

誠実で直球の人

来住千保美



©Christian Nieliinger

マエストロ・ツァグロゼクと会った人、そして一緒に食事をしたことがある人が真っ先に受ける印象は「早口、早食い」だろう。「早食い」について本人は「第二次世界大戦後、食糧難の時代に子供の多い家に育った。少しでもたくさん食べるために早食いになった」と言う。マエストロは6人兄弟姉妹の長男で双子の弟と、ほかに姉1人、弟と双子の妹たちがいる。双子の弟はプロの音楽家ではないが、ピアノが大好きで達者、マエストロは弟と共に2005年、アマチュアのピアノ・コンクールを設立した。

ツァグロゼク家は音楽好きで、三兄弟はレーゲンスブルク大聖堂少年合唱団に入団した。とくにマエストロの美

声はフルトヴェングラーの耳に留まり、55年夏、12歳の時にザルツブルク音楽祭の〈魔笛〉の第一の童子としてデビューした。これ以降、プロとしての音楽活動は63年にわたり、現在活躍する有名なプロ音楽家の中で最もキャリアの長い音楽家の一人だ。ちなみに、マエストロより誕生日が2日遅いダニエル・バレンボイムも当時ザルツブルク音楽祭に登場したが、マエストロは「僕と違い、ダニエルはすでにピアノの神童、大スターだったからね」と笑う。

さて、マエストロは「早口」だけでなく、正直で率直、飾り気がない。もともとドイツでははっきり意見を言い、そのストレートさは日本人的メンタリティーにとって面食らうことも多いが、マエストロはそのドイツでも、よりはっきりと発言する。一昨年9月『第1回ドイツ指揮者賞(国際指揮コンクール)』の授賞式でのエピソードを紹介しよう。審査委員長を務めたマエストロは受賞者発表の場で、司会者に「こんなに有能な若い指揮者がたくさんいて、選考は大変だったでしょう?」という質問を受けた。ところが、「い

や、全然そんなことはなかったですよ。優勝者は断トツでした」と答え、会場のケルン・フィルハーモニーに集まった聴衆からは思わず失笑が漏れた。社交辞令や忖度などは程遠い、直球の人だ。しかし、その誠実さには疑念の余地がない。

この性格ともの言い、現実主義と合理主義は、時折オーケストラと軋轢を生む原因にもなるのだろう。演奏の間違いなどをストレートに指摘する。やんわりとオブラートに包む言い方ではないからか、音楽家の中にはそれを逆恨みし敵視する人もいる(一方、指摘しなければ、「耳が悪い指揮者だ」と陰口を言うだろう)。しかし、正直で表裏のない性格は、結局、大きな信頼につながる。なんととっても、厳しさと誠実さがなければ芸術的創造は不可能なのだ。マエストロの音楽界への功績は多大であり、ドイツ連邦共和国はそれを讃え、2017年、マエストロにドイツ連邦共和国一等功労十字章を授与した。

ところで近年、世界中で寄宿学校、とりわけキリスト教界での児童虐待が明るみに出ている。レーゲンスブルク大聖堂合唱団の指導者は長年、前ローマ法王ベネディクト16世の兄ゲオルク・ラーツィンガーだった。カトリック界の最上層部が虐待の事実を掴み、隠蔽していたか大きく問われている。



マエストロはレーゲンスブルク大聖堂合唱団在籍中に経験した暴行の事実を語った。このことでもマエストロの正義感と勇気、包み隠しのない、曲がったことの大嫌いな性格が表れている。その後、マエストロのような著名人の証言もあり、被害者救済が進んでいる。

「子供たちが暴力をふるわれたり、虐待を苦に自殺したり、ひどいことがあった。偉い大人たちの二面性も見た。僕たち子供は無力、どうしたらよいかわからない中、大好きな音楽が大きな救いだった」。初めて出演したザルツブルク音楽祭の〈魔笛〉の指揮者は前年逝去したフルトヴェングラーに代わりゲオルク・シヨルティ、美術はオスカー・ココシュカだった。「素晴らしい芸術家たちに出会い、この時、音楽家になろうと心を決めたんだ。そして音楽が今日まで僕を導いてくれた」と話すマエストロ・ツァグロゼクの笑顔は、とても人懐っこい。

(きし ちほみ・音楽ジャーナリスト)



セバスティアン・ヴァイグレ ©読響

次期常任指揮者 ヴァイグレへの期待②

オペラでの活躍から見る ヴァイグレ

広瀬大介

オーケストラ奏者から 指揮者へ

オペラの世界で活躍している指揮者・歌手の中には、かつてプロ・オーケストラの楽団員だった、という前歴をもつひとが意外と多い。ドイツ・オペラを得意とする歌手に限っても、テノールのジークフリート・イェルザレム（ファゴット奏者）、クラウス・フローリアン・フォークト（ホルン奏者）などが有名なところだろう。指揮者ではマンフレート・ホーネック（ヴィオラ奏者）、そして、セバスティアン・ヴァイグレ（ホルン奏者）がその筆頭として挙げられる。

こういう前歴をもつ音楽家たちが超一流のポジションにまで登りつめることができたのは、やはりその経験を最大限に活かしたから、と考えるのが妥当であろう。かつてオーケストラという巨大組織の一員として働いていた音楽家は、そのオーケストラを伴奏にして歌ったり、あるいは実際に率いることになったりしたときに、自分だけで突っ走ってしまうことが決してない。音楽全体を見渡すと同時に、もともと手がけていたオーケストラ・パートの視点からも音楽を複眼的に見ることができ、アンサンブルの中で自分に求められている役割を瞬時に判断し、適切に振る舞うことができる。もっとも複

雑なアンサンブル形態であるオペラにおいて、こういう前歴をもつひとたちが大事にされるのは、ある意味当然とも言えるだろう。セバスティアン・ヴァイグレも、そのようにしてキャリアを築き上げてきたひとりである。

一流歌劇場での活躍

オペラ指揮者としてのヴァイグレの名声が多くファンに知られるようになったのは、21世紀初頭のことである。2002/03年シーズンに、リヒャルト・シュトラウスの歌劇〈サロメ〉〈影のない女〉を指揮し、前例のないほどの成功を収めたことによって、2003年秋にドイツ『オーパンヴェルト（オペラの世界）』誌の「年間最優秀指揮者」に選ばれた。やがて翌2004～09年にはバルセロナ・リセウ大劇場の音楽総監督、2008年から現在に至るまでフランクフルト歌劇場の音楽総監督を務め、このふたつの歌劇場を、ヨーロッパにおけるもっとも重要な歌劇場のひとつと呼ばれるレベルにまで引き上げている。当然、これほどの手腕を持ったマエストロを他の大劇場が放っておくはずもなく、メトロポリタン歌劇場、ベルリン国立歌劇場、ドレスデン国立歌劇場など、多くの一流歌劇場にいまなお客演を続けている。

フランクフルト歌劇場では、得意とするドイツ・オペラ作品、とりわけワーグナーとシュトラウスを集中的に取り上げており、ワーグナーについては〈さまよえるオランダ人〉以前の初期作品に至るまで上演・録音している。筆者は2018年5月に現地で〈ラインの黄金〉を聴く機会に恵まれた。役に慣れていない歌手を気遣っていたのか、ヴァイグレはややゆったりとしたテンポで、オーケストラと歌手、すべての出来事に目を配り、事故が起きればたちどころに立て直し、歌手が最高の状態で歌えるように気を配り、オーケストラを盛り立てる。まさに八面六臂の指揮ぶりを見せていた。常に完全な状態が整うわけではない歌劇場の日常で、プロとして水準以上の音楽を絶えず探し、それを実現にこぎつける指揮者の力量を垣間見た思いがした。

映像・録音で愉しめる ヴァイグレのオペラ

日本のオペラ・ファンに、オペラ指揮者としてのヴァイグレの存在がはつきりと印象づけられたのは、2007年、バイロイト音楽祭に初登場し、ワーグナー〈ニュルンベルクのマイスタージンガー〉を指揮した時だろう。とはいえ、この時のプロダクションは、巨匠の曾孫にあたるカタリーナ・ワーグナ

ーがバイロイトでの演出家デビューを飾ったものであり、その刺激的な演出もあいまって、どうしてもカタリーナのほうに話題が集中してしまった感があった。ヴァイグレはその蔭で、細かく、複雑な演技をこなさなくてはならない歌手陣に最大の注意を払いつつ、ワーグナーを知り尽くしたオーケストラからニュアンスに満ちたカラフルな音色を引き出ししている。第3幕でベックメッサー（ミヒャエル・フォレ）が独り舞台上で悩み苦しむ場面の彫琢などは、その白眉だろう。

自身のホームグラウンドであるフランクフルト歌劇場とは、近年発売が少なくなったドイツ・オペラの新しい録音を次々と世に問うており、同劇場の幅広い活躍を多くのオペラ・ファンに

知らしめている。真っ先に指を屈するべきはヴェラ・ネミロヴァ演出によるワーグナー〈ニーベルングの指環〉四部作のDVD&CDであろう。収録当時、このプロダクションに参加した中堅どころの歌手の多くは、現在では世界中の歌劇場で引く

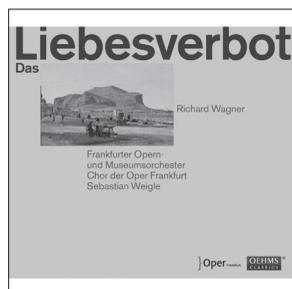
手あまたの存在となっており、歌手の実力を見極め、役とともに成長を促すヴァイグレのトレーナーとしての素顔も垣間見える。

前述の〈マイスタージンガー〉でもヴァルターを歌ったクラウス・フローリアン・フォークトが主人公パウルを歌うコルンゴルト〈死の都〉、あるいはワーグナーの初期作品〈恋愛禁制〉では、展開の早い喜劇的要素や豪華なオーケストレーションをじっくりと聴かせ、表現することに長けた指揮者の美質を感じられよう。その他にも、メトロポリタン歌劇場でのシュトラウス〈ばらの騎士〉、リセウ歌劇場でのワーグナー〈タンホイザー〉、ベルク〈ヴォツェック〉などが映像商品化されている。

お薦めのCD・DVD



シュトラウス〈ばらの騎士〉 ヴァイグレ指揮/メトロポリタン歌劇場、フレミング、ガランチャ他（2017年、DVD2枚組）
レーベル：Decca 品番：74-3944
©ユニバーサル ミュージック



ワーグナー〈恋愛禁制〉 ヴァイグレ指揮/フランクフルト歌劇場、ネイジー、リポア他（2012年、ステレオ）（CD3枚組）
レーベル：Oehms 品番：OC942



2016年8月23日読響〈定期〉より ©読響

読響とヴァイグレ、そしてシュトラウス・オペラ

2010年代以降は、日本でもヴァイグレの音楽を聴くことのできる機会が増えてきた。2012年には、「東京・春・音楽祭」での〈マイスタージンガー〉上演で来日している。読売日本交響楽団とは2016年8月にシュトラウスの交響詩〈ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら〉〈4つの最後の歌〉〈家庭交響曲〉を採り上げたのみならず、2017年7月には東京二期会主催の〈ばらの騎士〉で読響とともにピットに入っている。演出家リチャード・ジョーンズがグラインドボーン音楽祭で演出した、なにかと物議を醸した舞台ではあったが、演出のインパクトに負けないだけのパワーがオーケストラからも伝わり、燃焼度の高い公演となった。

ヴァイグレは同公演の記者会見で、

「前回の公演でとてもよい関係を築き、素晴らしい結果を出すことができた」。読響の演奏を称賛すると同時に、「ウィーン風のワルツが様式として併せ持つ軽やかさと華やかさ」を表現したいと語り、特に第3幕、オックスの退場時の音楽で実際にその響きを具現化し

ていた。こうした指揮者の要求に柔軟に応えることのできた読響との相性の良さが、その後の実り豊かな共演へとつながっていくだろう。

個人的には、2019年2月にフランクフルトで上演される、あまり上演機会に恵まれないシュトラウス〈ダフネ〉の上演を楽しみにしている。5月は、読響の常任指揮者としてモーツァルトからヘンツェにまで至るドイツ音楽の歴史を総ざらいするような、バラエティに富んだプログラムを指揮した後、6月には、同じ東京二期会に再度登板し、読響を率いてシュトラウス〈サロメ〉の上演が予定されており、〈ばらの騎士〉の時以上に密度の高い演奏が期待できよう。ドイツ・オペラ、そしてドイツ音楽の深奥を極めようと奮闘するヴァイグレの活躍を、読響と共に、現在進行形のかたちで堪能できる日々が訪れるのを心待ちにしている。

（ひろせだいすけ・音楽学、音楽評論）

心に残るクラシック

竹森俊平——②

Shunpei Takemori

大実業家であり大作曲家

アイヴズ：交響曲第4番、交響曲第2番



いつぞやこんな会話をした。相手：「ビジネスリーダーのためのクラシック音楽という出版企画があるのですが、良いアイデアはないですか？」筆者：「だったら、ビジネスリーダーだった作曲家の曲を聴いてもらったら」相手：「誰ですか?!」筆者：「チャールズ・アイヴズ」相手：「……」

アイヴズは、米国の20世紀初頭の保険業発展に貢献した偉大な実業家だ。彼は「就学期」「勤労期」「引退期」という人生のサイクルを円滑にするのを保険契約がいかに手助けできるか、という現代的発想を導入し、保険業を改革した。「余技」の作曲でも、数多くの現代的手法を導入したことで知られる。

大作曲家か？ うーん。筆者の現代音楽好きの友人でも、アイヴズが大作曲家と断言する者はいない。筆者も若干ためらう。だが、アイヴズの作品をコンサートで聴く楽しみはそれだけ増す。「本物か」を確かめる機会になる

のだ。アイヴズの作品の実演で記憶に残るものを話す。

1986年 米国クリーヴランド、セヴェランスホール

1985年から89年にかけて、米ニューヨーク州のロチェスターの大学に4年間在学し、経済学の学位を取った。ロチェスターも地方都市にしては音楽活動が盛んだが、その程度で満足できるわけがない。世界トップクラスのクリーヴランド管の定期会員になり、毎月1回、土曜日に片道4時間半のドライブをして出かけた。オンボロ車だったので、雪中でエンジンが止まったり、故障の修理に見知らぬ町で二日も過ごしたり。それにクリーヴランドという街、素晴らしい美術館もあり筆者は熱愛するが、その当時は治安が悪いことで知られ、米国内の評判は悪かった。「好きなアメリカの都市は？」と米国人に聞かれると、今でも「クリーヴランド！」と答えたくるが、ジョーク

と思われ、大笑いされるのが確実なので控えている。

当地で聴いた最初の演奏会のプログラムにアイヴズの交響曲第4番があった。1916年完成のこの曲の“コメディ”と題された第2楽章には、突然オーケストラが真っ二つに分かれ、まったく別箇の音楽を同時に演奏する箇所がある。ここは二人の指揮者を必要とする（いつぞや小澤征爾は演奏会で、ここを一人で振っていたが、一人だと指揮者の顔が向いた方が「主旋律」になる。やはり二人欲しい）。

この楽章が終わった瞬間、筆者の経験にないことが起こった。何人かが笑い出し、それが広がり、ホール全体が明るい笑いで包まれたのだ。今でも確信している。この反応は「絶対に」正しい。作曲家は意図してケツタイな曲を書いたので、素直にそう受け取り、聴くべきだ。指揮者のドホナーニも、副指揮者と顔を見合わせ、破顔一笑していた。クリーヴランド恐るべし！

1987年 ニューヨーク、エイヴリー・フィッシャーホール

バーンスタイン指揮のアイヴズの交響曲第2番。ニューイングランドの先達のこの曲を、バーンスタインは作曲された1901年の50年後に初演している。それから36年ぶりの再演。悪いわけがなからう！溜めをタップリ利かせたバーンスタイン節全開で、大興

奮。だが心の広いクリーヴランドの聴衆と比べ、この聴衆はダメ。ニューヨーク・フィ



チャールズ・アイヴズ (1874~1954)

ルは公開リハーサルがあり、朝からそれも聴いていたので曲が頭に入り、金管の不協和音の咆哮^{ほうこう}で全曲が閉じた後、思わず「ブラヴォー」と叫んだ。すると隣に座っていた、いかにもマンハッタンのハイソなマダムたちが「まあ」と眉をひそめたのだ。一人が「あなた、本当にこんな曲が良いと思うの？」と詰め寄った。極東の貧乏学生が心を傾けて聴いているものを、「君たちも米国の文化に心を開けよ」とか言いたかったが、やめました。だが、交響曲第2番は間違いのない名曲だろう。

アイヴズは曲中に、聴き慣れた米国民謡を貼り絵のように嵌め込んでいく。それでも楽章ごとに変化が生まれ、曲想は多彩で、夢見るような箇所は美しく、強く進むところは決然と響く。クライマックスの一点に集結する交響曲のダイナミックスが見事にできているのだ。何たる才能。アイヴズ中心のプログラムを読響も組んでほしいなあ。

“色彩の魔術師”カンブルランの極上のフランス音楽

3/7 (木) 19:00 第620回 名曲シリーズ
サントリーホール

3/9 (土) 14:00 第110回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール



©Christine Schneider
サラ・ルヴィオン

イベール：寄港地、フルート協奏曲

ドビュッシー（ツェンダー編）：前奏曲集、ドビュッシー：交響詩〈海〉

指揮：シルヴァン・カンブルラン（常任指揮者） フルート：サラ・ルヴィオン

豪華歌手陣の共演で贈るシェーンベルクの巨大作

3/14 (木) 19:00 第586回 定期演奏会
サントリーホール

完売



©Clive Barde
レイチェル・ニコルズ

シェーンベルク：グレの歌

指揮：シルヴァン・カンブルラン（常任指揮者）

ソプラノ：レイチェル・ニコルズ メゾ・ソプラノ：クラウディア・マーンケ

テノール：ロバート・ディーン・スミス、ユルゲン・ザッヒャー

バリトン・語り：ディートリヒ・ヘンシェル

合唱：新国立劇場合唱団（合唱指揮：三澤 洋史）

※当初発表したものから出演者が一部変更されました。

鮮烈なサウンド！ 小編成で披露する20世紀音楽選

3/19 (火) 19:00 読響アンサンブル・シリーズ 特別演奏会
紀尾井ホール



©Marco Borggreve
ピエール＝ロラン・エマール

《カンブルラン指揮「果てなき音楽の旅」》

ヴァレーズ：オクタンドル メシアン：7つの俳諧

シュルシ：4つの小品 グリゼー：〈音響空間〉から“パルシエル”

指揮：シルヴァン・カンブルラン（常任指揮者） ピアノ：ピエール＝ロラン・エマール

任期ラスト公演。カンブルラン、9年間ありがとう！

3/23 (土) 14:00 第215回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

3/24 (日) 14:00 第215回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール



シルヴァン・カンブルラン

ベルリオーズ：歌劇〈ベアトリスとベネディクト〉序曲

ベートーヴェン：ピアノ協奏曲 第3番 ベルリオーズ：幻想交響曲

指揮：シルヴァン・カンブルラン（常任指揮者） ピアノ：ピエール＝ロラン・エマール

3 月 公演の聴きどころ

3月は、2010年から常任指揮者を務めてきたカンブルランがいよいよ任期を終える。9年間の集大成として披露するのは、カンブルラン×読響時代を象徴するような三つのプログラム。7日《名曲シリーズ》、9日《みなとみらいホリデー名曲シリーズ》はイベールの人気作〈寄港地〉にドビュッシー〈海〉などを組み合わせたオール・フランスものだ。〈海〉は2006年にカンブルランが読響と初めて共演した際に取り上げた作品で、色彩豊かに進化した読響サウンドをお楽しみいただきたい。また、イベールのフルート協奏曲では、ドイツを拠点に活躍するルヴィオンが、輝かしい音色と完璧なテクニックで色彩感あふれる華やかな傑作を奏でる。

14日《定期演奏会》では、シェーンベルクの大作〈グレの歌〉を取り上げる。2015年の〈トリスタンとイゾルデ〉で圧倒的な歌唱を聴かせたニコルズとマーンケをはじめ、実力派声楽陣が揃う。日本が誇るプロ合唱団・新国立劇場合唱団との共演も楽しみだ。チケットはすでに完売しており、注目度の高さがうかがえる。

19日は、紀尾井ホールで《カンブルラン指揮「果てなき音楽の旅」》を開催する。曲目は、カンブルランが厳選した20世紀の4作品。各作品は8人から約30人の編成で書かれており、小編成ならではの音楽を堪能したい。また、メシアン〈7つの俳諧〉では“メシアン弾き”として世界的名声を得ているエマールが共演する。

23、24日《マチネーシリーズ》のメインは、カンブルラン^{おはこ}十八番のベルリオーズ〈幻想交響曲〉。作曲家自身の恋愛体験に基づく半自伝的な交響曲に思いを込め、ドラマティックに盛り上げる。前半は、フランスの巨匠エマールとベートーヴェンのピアノ協奏曲第3番で共演。9年間の有終の美を飾るにふさわしい、感動のサウンドが会場を包むだろう。（文責：事務局）

定期・名曲・みなとみらい	S ¥7,500	A ¥6,500	B ¥5,500	C ¥4,000
マチネー	S ¥7,500	A ¥5,500	B ¥4,500	C ¥4,000
3/19 特別演奏会	一般 ¥5,000	学生 (25歳以下) ¥2,000		

新鋭・鈴木優人による〈パトルーシュカ〉でシーズン開幕!

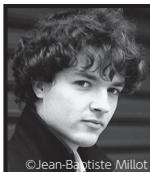
4/4 (木) 19:00 第621回 名曲シリーズ
サントリーホール

ラモー：歌劇〈優雅なインドの国々〉組曲
ショパン：ピアノ協奏曲 第2番
ストラヴィンスキー：バレエ音楽〈パトルーシュカ〉(1947年版)

指揮：鈴木優人
ピアノ：レミ・ジュニエ



鈴木優人



レミ・ジュニエ

エストニアの鬼才が指揮し、ノルウェーの名花フラングが共演

4/17 (水) 19:00 第587回 定期演奏会
サントリーホール

トゥール：共同委嘱作品(アジア初演)
ストラヴィンスキー：ヴァイオリン協奏曲
武満 徹：星・島(スター・アイル)
シベリウス：交響曲 第5番

指揮：オラリー・エルツ
ヴァイオリン：ヴィルデ・フラング



オラリー・エルツ



ヴィルデ・フラング

華麗なサウンドで魅了! マイスターが振る〈展覧会の絵〉

4/27 (土) 14:00 第216回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

4/28 (日) 14:00 第216回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

プロコフィエフ：交響曲 第1番〈古典〉
カサド：チェロ協奏曲
ムソルグスキー(ラヴェル編)：組曲〈展覧会の絵〉
指揮：コルネリウス・マイスター(首席客演指揮者)
チェロ：上野通明



コルネリウス・マイスター



上野通明

新時代へ! 第10代常任指揮者ヴァイグレの就任披露演奏会

5/14 (火) 19:00 第588回 定期演奏会
サントリーホール

ヘンツェ：7つのポレロ
ブルックナー：交響曲 第9番
指揮：セバスティアン・ヴァイグレ(常任指揮者)



セバスティアン・ヴァイグレ

ドイツを代表する名匠ヴァイグレが振る《極上のブラームス》

5/18 (土) 14:00 第217回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

5/19 (日) 14:00 第217回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

ロルツィング：歌劇〈ロシア皇帝と船大工〉序曲
モーツァルト：ピアノ協奏曲 第21番
ブラームス：交響曲 第4番
指揮：セバスティアン・ヴァイグレ(常任指揮者)
ピアノ：岡田 奏



セバスティアン・ヴァイグレ



岡田 奏

ヴァイグレが〈英雄〉を指揮し、チェロの新星ハーゲンが共演

5/24 (金) 19:00 第622回 名曲シリーズ
サントリーホール

5/26 (日) 14:00 第111回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール

ワーグナー：楽劇〈ニュルンベルクのマイスタージンガー〉
第1幕への前奏曲
シューマン：チェロ協奏曲
ベートーヴェン：交響曲 第3番〈英雄〉
指揮：セバスティアン・ヴァイグレ(常任指揮者)
チェロ：ユリア・ハーゲン



セバスティアン・ヴァイグレ



ユリア・ハーゲン

読響チケットWEB <http://yomikyo.pia.jp/>

インターネットで24時間いつでもお申し込みができ、ご自身でお好みの座席をお選びいただけます。上記URLもしくはホームページのトップページ【読響チケットWEB】のボタンから、ぜひご利用ください。

※初回お申し込み時は利用登録(無料)が必要です。

お申し込み・
お問い合わせ

読響チケットセンター 0570-00-4390
(10:00~18:00/年中無休) ヨミキョー
ホームページ・アドレス <https://yomikyo.or.jp/>

都民芸術フェスティバル

完売

■ 2/27 (水) 19:00 東京芸術劇場コンサートホール

指揮：カーチュン・ウオン

ピアノ：小山実稚恵

バーバー：弦楽のためのアダージョ

モーツァルト：ピアノ協奏曲 第20番

ブラームス：交響曲 第4番

[料金] A ¥3,800 B ¥2,800 C ¥1,800 / 学生：A ¥3,000 B ¥2,000 C ¥1,000

[お問い合わせ] 日本演奏連盟事務局

03-3539-5131 (平日10～18時)

フレッシュ名曲コンサート

■ 3/2 (土) 15:00 めぐろパーシモンホール

指揮：カーチュン・ウオン

ピアノ：藤田真央

ラフマニノフ：ピアノ協奏曲 第3番

ムソルグスキー (ラヴェル編)：組曲〈展覧会の絵〉

[料金] S ¥3,500 A ¥2,800 学生 ¥1,000

[お問い合わせ] めぐろパーシモンホールチケットセンター

03-5701-2904 (10～19時)

芸劇&読響 春休みオーケストラコンサート

■ 3/27 (水) 11:30 / 13:30 東京芸術劇場コンサートホール

指揮：鈴木優人

トランペット：三村梨紗

ナビゲーター：中井美穂

ビゼー：歌劇〈カルメン〉から“前奏曲”

ハチャトゥリアン：バレエ〈ガイヌ〉から“剣の舞”

ミュージカル『サウンド・オブ・ミュージック』セレクション

久石 譲：『となりのトトロ』より“さんぽ”ほか

[料金] S ¥3,500 A ¥2,500 こども (3才以上小学生まで) ¥1,000

[お問い合わせ] 東京芸術劇場ボックスオフィス

0570-010-296 (10～19時/休館日を除く)

H ighlights of 2019-20 season

2019-20シーズンの聴きどころ③

オーケストラを聴く醍醐味を味わえるのが《みなとみらいホリデー名曲シリーズ》。名曲とともに休日をゆったりと横浜で過ごしたい。《読響アンサンブル・シリーズ》では、読響の名手たちが室内楽に挑む。刺激的なプログラムが驚きと発見をもたらす。
(飯尾洋一(いひよういち)・音楽ライター)

みなとみらいホリデー名曲シリーズ

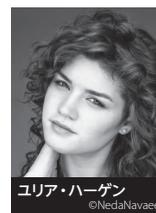
大作曲家たちの代表作を充実した指揮者陣とソリスト陣で聴く《みなとみらいホリデー名曲シリーズ》。全8公演が開催される。



セバスティアン・ヴァイグレ ©読響

5月は第10代常任指揮者セバスティアン・ヴァイグレが得意のドイツ音楽プログラムを披露する。まずはワーグナーの楽劇〈ニュルンベルクのマイスタージンガー〉

第1幕への前奏曲で壮麗に幕を開ける。



ユリア・ハーゲン ©NedaNavae

シューマンのチェロ協奏曲でソロを務めるのはユリア・ハーゲン。父クレメンスゆずりの才能はいかに。ベートーヴェンの交響曲第3番〈英雄〉では重厚な本格派演奏の期待が高まる。



大植英次 ©飯尾洋一

6月は大植英次が客演する。リムスキー=コルサコフの交響組曲〈シェエラザード〉では絢爛たるオーケスト

レーションに加えて、大植ならではの語り口の豊かさを楽しみたい。パウエルのホルン協奏曲では、読響が誇る首席ホルン奏者、日橋辰朗がソロを務める。パウエルは20世紀に活躍したチェコの作曲家。エネルギーで躍動感にあふれた、一言でいえば「カッコいい」作品だ。



日橋辰朗 ©読響

7月は長年バンクーバー交響楽団の音楽監督を務めたイギリスのベテラン指揮者、ブラムウェル・トーヴェイが招かれる。ホルストの組曲〈惑星〉で星々へと思いを馳せる。ラフマニノフのピアノ協奏曲第2番でソロを弾くのはリュカ・ドゥバルグ。2015年のチャイコフスキー国際ピアノ・コンクールで一躍時の人となった逸材である。



ブラムウェル・トーヴェイ ©David Cooper



リュカ・ドゥバルグ ©Felix Broede-Sony Music Entertainment

プログラム

特集

今後の公演案内

読響ニュース

読響アンサンブル・シリーズ

よみうり大手町ホールで開催される《読響アンサンブル・シリーズ》では、読響の名手たちが室内楽に取り組む。このシリーズの魅力は編成とレパートリーの多彩さ。日頃の公演ではなかなか聴けない作品を体験するチャンスだ。開演時間は19時30分と遅めなので、余裕を持って会場に足を運べるのもうれしい。

7月12日は《鈴木康浩プロデュースの室内楽》。読響ソロ・ヴィオラ奏者の鈴木康浩を中心に、ルクレール、ヒンデミット、ブラームスの作品が演奏される。編成はそれぞれヴィオラ2本、弦楽三重奏、弦楽五重奏とさまざま。ヒンデミットのモダニズムとブラームスのロマンティシズムが鮮やかな対比を描く。

11月18日は《中川賢一と読響メンバーによるライヒ & メシアーン》。ピアノの中川賢一とともに、異なる作風を持つふたりの作曲家に焦点を当てる。ライヒの《ダブル・セクステット》は、2009年度ピューリツァー賞音楽部門受賞作で、フルート、クラリネット、ヴァイオリン、チェロ、ヴィブラ

フォン、ピアノの六重奏を二組用いるユニークな編成を持つ。特異な音場と音色のおもしろさ、短い音型の反復がもたらす陶酔感を味わいたい。メシアーンの《世の終わりのための四重奏曲》は作曲者が第二次世界大戦中にドイツ軍の捕虜収容所で書いた傑作。

2020年1月10日は《日下紗矢子リーダーによる室内合奏団》。特別客演コンサートマスターである日下紗矢子のヴァイオリンを中心に、モーツァルトのディヴェルティメント第11番とシェーンベルクの《浄夜》(弦楽合奏版)が演奏される。モーツァルトでは弦楽器にオーボエとホルンが加わって、快活で生命力にあふれた楽想がくりひろげられる。一方、シェーンベルクは後期ロマン派が到達した濃密な官能性が聴きもの。

2月14日は《上岡敏之と読響メンバーの室内楽》。指揮者として活躍する上岡敏之はピアノの名手でもある。フォーレとショーンソンでフランス音楽の魅力伝える。ショーンソンのピアノ、ヴァイオリンと弦楽四重奏のための協奏曲を聴ける貴重な機会だ。

9月はふたたびセバスティアン・ヴァイグレが登場する。メンデルスゾーンの交響曲第4番《イタリア》で、さわやかな秋風を吹かせてくれることだろう。チャイコフスキーのヴァイオリン協奏曲では、1994年生まれぼってきの小林彦成がソリストに抜擢される。輝かしいコンクール歴を誇る新鋭だけに、思い切りのよいソロを聴かせてくれるのでは。

10月は名誉指揮者ユーリ・テミルカーノフが指揮台に上る。チャイコフスキーの交響曲第5番でロシア音楽の神髄に迫る。シベリウスのヴァイオリン協奏曲では、1995年ウィーン生まれの若手、エマニュエル・チェクナヴォリアンがソロを務める。チェクナヴォリアンといえば、かつて読響にも招かれた「爆演」指揮者ロリスの名を思い出す方もいらっしゃるだろうが、その息子がエマニュエルだ。

11月は特別客演指揮者の小林研一郎が十八番のドヴォルザークを振る。チェロ協奏曲と交響曲第9番《新

世界から》は、いずれも作曲者がアメリカに渡って書いた大傑作。炎のマエストロことコパケンの情熱のタクトにオーケストラが燃えあがる。チェロ協奏曲の独奏はロンドンを拠点に活躍する伊藤悠貴。大器と評判の若手だ。

2月は首席客演指揮者の山田和樹と鬼オイーヴォ・ポゴレリッチの共演が注目される。レパートリーによっては極端なテンポ設定を採用するポゴレリッチだが、はたしてシューマンのピアノ協奏曲はどんな演奏になるのか、まったく予想がつかない。ドヴォルザークの交響曲第7番では、山田和樹が読響から温かみのあるサウンドを引き出してくれるにちがいない。

3月は、セバスティアン・ヴァイグレによるブラームスの交響曲第1番で、シーズンを力強く締めくくる。ドイツ人の父と日本人の母を持つアラベラ・美歩・シュタインバッハーはシューマンの野心作、ヴァイオリン協奏曲に挑む。この味わい深い傑作の魅力を存分に伝えてくれることだろう。



伊藤悠貴 ©Charlotte Fielding



山田和樹 ©読響



イーヴォ・ポゴレリッチ ©Alfonso Batalla



アラベラ・美歩・シュタインバッハー ©Peter Rigaud



小林彦成 ©Shigeto Imura



ユーリ・テミルカーノフ ©読響



エマニュエル・チェクナヴォリアン ©JUVE ARENS



小林研一郎 ©読響



日下紗矢子 ©読響



上岡敏之 ©武藤華